

ALC NetAcademy2 の導入および 活用に関する報告書

——全学共通教育科目・言語コミュニケーション科目としての英語の事例——

横 山 仁 視
キム・ブラッドフォード・ワッツ

0. はじめに

入試制度が多種多様化してきていることが原因となり、入学時の学生の英語の基礎学力には従来以上の差が生じていることは周知の通りである。そのため、基幹時間割の中での限られた授業時間数だけでは十分な語学修得レベルに達することが難しい学生も現れている。そこで、このような学力差の隔たりの問題を解決する一つ的手段として、本学の教養英語では、eラーニングの活用を行っている。

本学の全学共通教育科目である言語コミュニケーション科目としての1年時必修のReadingの授業は、2008年度から異文化理解や異文化間コミュニケーションを内容とした統一指定教科書およびこの教科書を英文読解することを補完するものとしてeラーニング教材（ALC NetAcademy2）を並行活用している。またCommunicationの授業では、リスニング力を強化する補助教材として活用している。

本稿は、2007年度後期に実施したパイロット・スタディおよび導入時の2008年度から2013年度までの成果と今後の課題をまとめ、本学の今後の教養科目としての必修英語教育に役立てることを目的とする。

1. 全学共通教育科目としての言語コミュニケーション科目

本学の全学共通教育科目としての外国語（英語・フランス語・中国語・ドイツ語・コリア語）教育科目は、「言語コミュニケーション科目」として文学部外国語準学科が担当している（短大は2010年度まで。法学科は2011年度から）。このうち1回生は英語と初修外国語から1言語を選択し8単位が必修である。各言語とも週2回の授業があり、日本人教員担当のリーディングとネイティブ教員担当によるコミュニケーションに焦点を当てた授業がそれぞれ1回開講されている。これら外国語科目の教育目標は4技能の習得はもちろんのこと、自国の文化と異文化の文化を比較しその類似点と相違点を確認し、それらの背後にある考え方や価値観を理解することにより、毎年新入生に配布される *IRIS* には次のように明記されている。

「京都女子大学の学生全員が外国語を履修しなくてはならないのには理由があります。単に外国語で情報を得たり、発信したりすることができるようになることだけが外国語学習の目的ではありません。広い視野で物事を見ることのできる、ほんとうに教養ある人間になるためには、母語とは異なる言語や文化の学習が不可欠だと考えるからです。」(*IRIS 2014*: p. 1)

2. *ALC NetAcademy2*（スーパースタンダードコース） の学習コンテンツ

スーパースタンダードコースの学習コンテンツは表1の通りである。主となる学習はリーディングとリスニングで、それぞれ初級の1レベルから上級の5レベルまで通常モードが10 units とアドバンスモードの10 units から構成されている。ジャンルとしては、リーディングが生活、文化、社会、科学、経済、国際関係へと、身の回りの生活レベルから global issue に関する内容へと段階的に広がりを見せる。リスニングも同様に、日常会話レベルのダイアログから

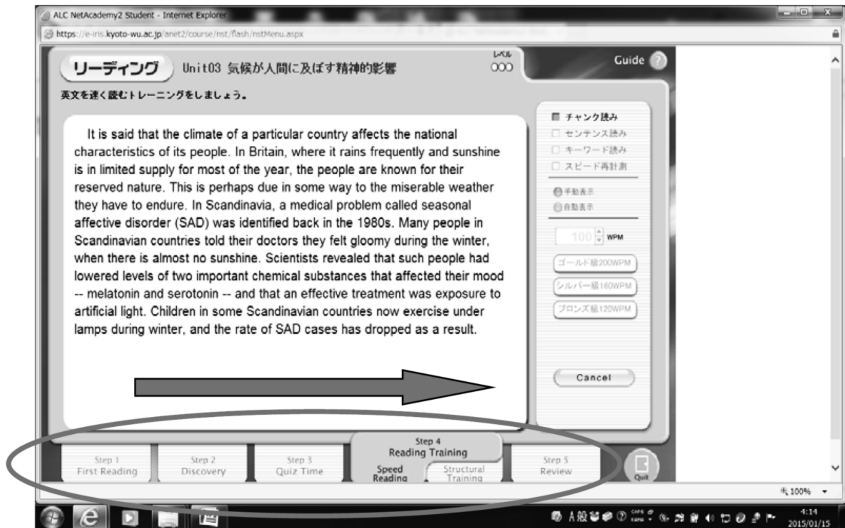
モノログ、ニュース、アナウンスへと内容的に傾斜配分されている。1つのユニットは「通常モード」と「アドバンスモード」から構成されているが、「アドバンスモード」は「通常モード」を学習した後にゲーム感覚で発展的な学習を体験することができる。

表1 ALC NetAcademy2 の学習コンテンツ

レベル診断テスト	語彙診断テスト									
	リスニング診断テスト									
修了テスト	語彙診断テスト									
	リスニング診断テスト									
	1 レベル		2 レベル		3 レベル		4 レベル		5 レベル	
	易 ←──									

リーディングおよびリスニングの各ユニットの学習は、以下の図1のように Step 1 から Step 5 までの段階的な学習の流れと学習機能を備えている。特に、リーディングの Step 4 の「チャンク読み」（意味のかたまり）と「キーワード読み」（内容語）およびリスニングの Step 4 の「シャドーイング」（音声反復練習法の一つ）の学習機能に大きな学習効果があると言われている（門田：2007, 2012; 玉井：1998; Lambert：1988など）。

図1 リーディングの学習画面



(リーディング)

Step 1: First Listening ユニット全体を自分のペースで読み、リーディングスピードを計る。

Step 2: Discovery 英文や日本語訳、ポップアップ機能による注釈を使って内容を理解する。

Step 3: Quiz Time 「ここを確認しよう」の学習機能を活用して理解度チェックの効率を図る。

Step 4: Reading Training

Speed Reading 「チャンク読み」「キーワード読み」の機能を使い、効率のよい読み方を身につける。

Structural Training 「主語・動詞トレーニング」「かえり読み防止トレーニング」機能を活用して英語の文構造を理解する。

Step 5: Review ユニットの英文、日本語訳、注釈を表示して学習の総まとめを行う。

(リスニング)

Step 1: First Listening ユニット全体を聞いて、聴き取れる部分と聴き取れない部分を区別する。

Step 2: Discovery 英文や日本語訳、ポップアップ機能による注釈を使って内容を理解する。

Step 3: Quiz Time 「本文再生」機能や「Hint」機能を使い、質問に対する理解度をチェックする。

Step 4: Sound Training 「ブランククイズ」機能や「シャドーイング」機能を使い、音声を確実に聴き取る訓練を行う。

Step 5: Review ユニットの英文、日本語訳、注釈を表示して学習の総まとめを行う。

3. 英語学習支援システム ALC NetAcademy2 導入までの経過

2007年6月22日開催の情報システム委員会において、業者のデータセンター（アプリケーションを購入しサーバを借用）のネットワークシステムを利用しての本システムを導入することが決定された。その後、9月3日に機器の納品が行われ、後期開講の9クラスの授業でパイロット使用を行った。その結果、特に大きな問題は発生せず、想定している仕様においては支障なく運用できることを確認した。さらに、2008年度からの本格的運用を開始するにあたり、サーバへのアクセス負荷実験を実施した（2007年10月4日、30日、31日）。この結果を踏まえサーバの稼働状況を予測し、議論を積み重ね検討した結果、次の結論に達した。（資料1を参照）

(1) 検討事項

- 1) 英語学習支援システム「ALC NetAcademy2」を学内外から150台以上同時使用することでアクセスおよびパフォーマンスに支障がないか。
(※1クラス最大40人で最大4クラスを同一時間帯に実習した場合を想

定している。)

- 2) 1)の環境条件で使用できない場合、利用や運用方法の工夫で問題を回避できないか。

(2) 結果

1) 負荷実験

- i) 10月4日、Windows の3教室を使い同時起動実験を行った。

120台までは支障なく起動できたが、150台の起動では7台が接続に失敗した。しかし、サーバへのCPU 負荷が10%程度であったことから、接続できなかった原因は、本学のネットワーク環境側にあるのではないかと考えられる。事実、150台を時間差を設けて使用した場合には、問題なく全台数の初期起動に成功した。

- ii) 10月30日、学外（自宅）からのアクセスおよび起動状況を確認するために、同時起動実験を行った。参加学生が23名程度であったため、得られた負荷データからは有益な結論が得られなかった。

- iii) 10月31日、パイロットで指定されたクラスの授業中に、3クラス同時の起動実験を行った。受講生が90名程度での同時使用においては特に支障なく起動できた。

2) 2008年度からの本格導入運用への対応

当初の計画では、アプリケーションサーバ1台、データベースサーバ1台、負荷分散機器1台であったが、パイロット使用である2007年度後期導入機器（アプリケーションサーバ1台、データベースサーバ1台）を運用方法（同一時間帯の ALC 実習クラス数の上限を設定し、週をずらして行うなど）を工夫して分散利用することにより、全1回生必修の英語の授業（Reading）での使用に支障なく対応できると判断した。ただし、2008年度からの使用において、想定外（同時利用者150名以上など）の状況が生じ支障が起こった場合には、特別の措置を大学側をお願いする可能性を残すに至った。

4. パイロット・スタディの実施結果

4.1. 実施クラス

2008年度からの本格的な運用を前に、2007年度後期において次の9つのクラス（当時の Basic、General、Challenge コース）の学生を被験者としてパイロット調査を行った。抽出したクラスは大学および短期大学部の必修英語クラスの学力的に中間的なクラスおよび選択英語のクラスで、できるだけ専任教員が担当している以下のクラスで実施した。

【大学・必修英語】

火曜日 4 時限：史学科、Basic コースの Reading の授業、専任教員

火曜日 4 時限：史学科、General コースの Reading の授業、非常勤講師

金曜日 1 時限：史学科、General コースの Reading の授業、非常勤講師

金曜日 1 時限：史学科、Challenge コースの Reading の授業、専任教員

【短期大学部・必修英語】

水曜日 2 時限：造形、Basic コースの Reading の授業、専任教員

水曜日 2 時限：造形、General コースの Reading の授業、非常勤講師

水曜日 2 時限：造形、General コースの Communication の授業、専任教員

【大学・選択科目】

木曜日 3 時限：英語、専任教員

【短期大学部・選択科目】

木曜日 4 時限：英語、非常勤講師

4.2. 各コースと課題ユニット範囲の設定

2008年度からの本システムの導入活用時には短期大学部（2010年度まで）も開講されていたため、大学の3つのコース（Basic、General、Challenge）と短期大学部の2つのコース（Basic、General）の合計5つのコースが存在した。その5コースに課題ユニットの難易度を鑑みてeラーニング教材のレベル

を表2のように段階的に振り分けた。リーディングとリスニングの学習コンテンツの課題ユニットのレベルと数(10ユニット)は同じで、大学の Basic と短期大学部の General のスタートレベルを同じに設定した。課題モードは「通常モード」を必修とし、「アドバンスモード」は任意とした。

表2 パイロット・スタディにおける学習コンテンツのレベルと各コースの課題範囲

		1 レベル		2 レベル		3 レベル		4 レベル		5 レベル	
		<div> <div>易</div> <div>←</div> <div>→</div> <div>難</div> </div>									
		通常 モード	アドバ ンスモ ード	通常 モード	アドバ ンスモ ード	通常 モード	アドバ ンスモ ード	通常 モード	アドバ ンスモ ード	通常 モード	アドバ ンスモ ード
リーディングの Unit 数		10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
リスニングの Unit 数		10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
短期大学部 Basic コース	R/L	→									
短期大学部 General コース	R/L			→							
大学 Basic コース	R/L			→							
大学 General コース	R/L					→					
大学 Challenge コース	R/L							→			

4.3. パイロットクラスのアナケート集計結果

学習後、各クラスではその使用に関するアンケート調査を行った。表3はその回答結果をまとめたものである。スケールは、表の下に記載したように、3から1にしたがってより否定的な回答を、4から6になるにつれて肯定的な回答を表している。1から6のそれぞれのスケールの数字は回答人数を表す。便宜的に否定的な回答群と肯定的な回答群の2つに分けて比率を示した。概ね好意的な回答であると理解できるが、特に表中の網掛けをしている質問項目4の「通常の授業に加えて学習することで、読む力/聴く力が伸びていると感じる」と8番の「今後も通常の授業に加えて、こうしたコンピュータを活用した学習

を続けたい」については決して大きな差があったとは言えない点は留意しなければならない。また、リーディングに比べてリスニングの内容・学習について好意的な回答比率が高かったことは、学習者の音声学習に対する興味には強いものがあることを示している可能性も指摘できる。2の「課題学習に意欲的に取り組んだ」に肯定的な回答が多かったのは、eラーニング学習という新しい学習方法に対する期待と関心の表れと読み取れる。また、3の「一度に集中して課題をするのではなく、計画的に課題学習に取り組んだ」に否定的回答が多かったのは、継続した学習の大切さを理解させ、学習者が自律した学習(learner autonomy)を維持することの難しさを露呈している。この点については、パイロット・スタディーの被験者を敢えて英語学習意欲がより高い英語専攻の学習者ではなく、英語力や学習意欲が中間層と思われる学習者を選んで実施したことや、本システムの機能面である、各クラスごとに課題学習ユニットと学習設定をカスタマイズできないシステム上の問題も一因と考えられる。

表3 パイロットクラスのアンケート集計結果

	質問項目	スケール					
		Negative ← Positive					
		1	2	3	4	5	6
リーディング ユニット	1. リーディングの内容に興味を持てた	10	27	40	96	57	13
		31.7%			68.3%		
	2. リーディングの英文は読みやすかった	8	12	63	87	61	12
		34.2%			65.8%		
リスニング ユニット	3. 画面上の解説は分かりやすかった	4	16	39	81	83	15
		24.8%			75.2%		
	4. 通常の授業に加えて学習することで、読む力が伸びていると感じる	12	22	61	79	40	11
		42.2%			57.8%		
リーディング ユニット	1. リスニングの内容に興味を持てた	9	14	36	99	67	22
		23.9%			76.1%		
	2. リスニングの英文は読みやすかった	6	17	43	89	75	18
		26.6%			73.4%		
リスニング ユニット	3. 画面上の解説は分かりやすかった	4	8	26	95	85	21
		15.9%			84.1%		
	4. 通常の授業に加えて学習することで、聴く力が伸びていると感じる	11	17	57	74	60	21
		35.4%			64.6%		

共通	1. 課題ユニットの数は適切だった	5	13	50	94	66	15
		28%			72%		
	2. 課題学習に意欲的に取り組んだ	7	17	71	85	44	15
		39.7%			60.3		
	3. 一度に集中して課題をするのではなく、計画的に課題学習に取り組んだ	23	67	77	43	23	11
		68.4%			31.6%		
	4. 課題ユニットを学習したのは、もっぱら学内からだった	36	32	30	32	50	63
		40.3%			59.7%		
共通	5. 学内で課題ユニットを学習した時、利用可能なコンピュータ教室があった	17	18	36	57	67	52
		28.7%			71.3%		
	6. コンピュータのトラブルは無かった	10	17	30	38	55	89
		23.8%			76.2%		
	7. 教材にログインする時は問題なくスムーズにできた	17	8	42	40	67	73
		27.1%			72.9%		
	8. 今後も通常の授業に加えて、こうしたコンピュータを活用した学習を続けたい	28	22	56	57	30	24
		48.8%			51.2%		

(スケールの区分)

- 1: 全くそう思わない 2: そう思わない 3: あまりそう思わない
4: いくらかそう思う 5: そう思う 6: 全くそう思う

また、自由記述の意見としては以下のものがあった。【肯定的な意見】【否定的な意見】【混在型の意見】に分類する。

【肯定的な意見】

1. TOEIC 対策ができるので大変勉強になった。
2. シャドーイングで発音練習できるのは、英文を読むのも早くなるし、発音を聞いてすぐ声に出せるので楽しかった。
3. 私はリスニングが苦手なので、今回の英語学習はとても役に立ちました。良い機会なので可能な限り英語学習をしていきたいです。
4. 楽しい授業でした。

【否定的な意見】

1. アドバンスモードが私にとっては非常に難しかった。
2. あまり意味があるようには思わない。家でもやることが多いので嫌だった。
3. 宿題の締め切り日だけでなく時間も指定されると通いの生徒には辛い。

4. 授業中にトラブルがあったので、改善したほうが良いと思う。
5. 課題をするのに途中から細かく決められて嫌だった。もっと自由で良いのではないか。
6. 画面を見続けるので目が疲れました。
7. 家のパソコンが壊れたり、休暇中 KWINS が閉じられたり、コンピューター教室が混雑したり、ヘッドフォンが壊れていたりで勉強する環境がなかなか得られなかった。
8. 途中結果を見たら記録に残らないなどのトラブルがあった。少し課題が多かったので、あまりゆっくり時間をかけられなかった。リスニングはいいけど、リーディングはあまりよくない。
9. もっと興味のある内容だと良かった。現代の大学生に向けた内容にするべき。眠くならないようなをお願いします。
10. ALC はやるのが大変めんどろでした。あまり英語が伸びたように感じなかった。パソコン室や寮でパソコンが使えなかった時が大変困った。
11. 時間の浪費だと思う。他の授業などの大きな負担となった。
12. 期限をもっと細かくして欲しかった。
13. 授業で ALC を使うことで教室変更が多く、教室を間違えることが多かったので困った。
14. なぜか家のパソコンからログインできませんでした。
15. 学外からのアクセスをもう少しやりやすくして欲しい。
16. どの課題をすればよいのかユニットがわかりにくかったので、できればもう少しわかりやすく表記して欲しいです。
17. 課題ユニットがわかりづらかったです。

【混在型の意見】

1. 現状の英語力を保つには役立つ教材だと思うが、読む力や聴く力が伸びるかどうかというとし答えに迷ってしまうと思う。内容としてはしっかりしたものであり、うまく活用できればとても良い教材だと思う。
2. リスニングをする機会を与えてもらえてとても良い経験になりました。家

ではできないからです。

3. リーディングの力もリスニングの力も毎日続けてやれば力がつくと思います。でもなかなか時間がなく途中やらない日が続いてしまいました。リーディングを ALC でやってみて、私だけかもしれませんが目がとても疲れました。
4. リスニングは力になると思う。しかし、リーディングは長時間パソコンを見ることは大変なことなのでやりにくかった。
5. 提出日直前に焦ってやるパターンが多かったので、もし授業として取り入れるなら週ごとの宿題として課題を行うべき。
6. 大変だったけど、文章自体は読みやすい内容だった。
7. もっと計画的にアルクをやればよかった。
8. アルクの教材自体はわかりやすくてよかったです。だけど、普通の授業＋課題は大変でした。
9. 初めに行った TOEIC テストのトラブル（先にリスニングの点数を見ると、最後には消えていた）をアナウンスして欲しかったです。
10. パソコンで英語学習は新鮮で楽しく取り組めたが、課題ユニットの出し方などを考えないと意味のない学習となる気がした。でもリスニングはとても良いと思う。
11. 内容は面白そうにまとめていると思いますが、通常の語学の授業の予習復習や他の科目の勉強もあるので、合間にするのが少し面倒でした。
12. いろんな意味でとても大変でした。リスニングの練習ができるのはよかった。

肯定的な意見としては、本学習ソフトを活用した e ラーニング学習が座学では味わうことのできない学習ツールの新たな発見として身近に感じた意見として見てとれる。一方、否定的な意見で目立つ意見に、通常の英語および他の授業以外に加えて指定される課題を学習しなければならないことへの負担が挙げられる。敢えて英語を専攻する学生を対象としなかったことで、通常の授業との関連性を積極的に伝えきれず、結果的に動機づけを促すことが要因として考

えられる。また、学習履歴が正しく残らないなど学習画面のトラブルや学生寮でのコンピュータ環境の問題も留意しなければならない意見である。こうした側面は積極的な学習意欲を欠いてしまうことへの要因となりうることから、本格導入に向けて改善する必要がある。一方で、本来eラーニング学習の本質は自分のペースで学習することにメリットがある点を考慮すれば、教養英語として学習者の動機づけを持続させることの難しさと工夫が課題として残ったと言える。

5. 2008年度からの本格導入に向けて

ALC NetAcademy2 は全国の400校以上の教育機関で採用されている（2011年9月現在）。導入活用の実態は様々で、カリキュラムとは連動させず自由に開放している教育機関からクラス単位や学科単位、学部単位、全学的に活用している現場まで多種多様である。本学では ALC NetAcademy2 のスーパースタンダードコースを導入しているが、2008年度の本格導入時においては、1年生の全学共通英語の必修英語の科目と連動させ活用しているのは本学を含め数校のみであった。

5. 1. 1 回生必修英語のカリキュラム表

表4は1回生の必修科目表である。英語圏の文化について書かれたエッセイを主に「読む」という言語活動を通じて英文読解力を養う「英語 IA1」と「英語 IB1」の授業を日本人教員が、また、「聴く」「話す」のコミュニケーション運用能力の訓練をする「英語 IA2」と「英語 IB2」の授業をネイティブ教員が担当している（Introductory は日本人教員）。各コースは、2010年度までは受講者の自己申告による Basic、General、Challenge の3のレベル別コースであったが、2011年度からは入学時に行うプレースメントテスト（ACE Placement）のスコアを基に、Introductory、Intermediate、Advanced の3つのコースに名称変更し習熟度別のクラス編成を行っている。クラス開講数は、Reading と Communication の科目が前期・後期それぞれ55クラスである。

表 4 言語コミュニケーション科目の1年必修英語カリキュラム

セメスター	第1セメスター〔前期〕		第2セメスター〔後期〕	
科目名 (内容)	「英語 IA1」 (Reading)		「英語 IB1」 (Reading)	
コース	Introductory (Basic)	日本人教員 担当	Introductory (Basic)	日本人教員 担当
	Intermediate (General)		Intermediate (General)	
	Advanced (Challenge)		Advanced (Challenge)	
科目名 (内容)	「英語 IA2」 (Communication)		「英語 IB2」 (Communication)	
コース	Introductory (Basic)	日本人教員 担当	Introductory (Basic)	日本人教員 担当
	Intermediate (General)	ネイティブ 教員担当	Intermediate (General)	ネイティブ 教員担当
	Advanced (Challenge)		Advanced (Challenge)	

表5は2011年度入学生から実施したプレースメントテストの点数幅を表したものである。Level 1が習熟度の低いIntroductoryコースで、レベル番号の最も高いクラスがAdvancedコースである。国文学科を例に挙げると、プレースメントテストの点数を基に開講クラス数の6クラスに分割している。Level 1がIntroductoryコース、level 2から5がIntermediateコース、level 6がAdvancedコースである。また、6クラスの人数は均等ではなく、Introductoryコースの人数を他コースの人数よりも小さくし、きめ細かな教育指導ができるよう考慮している点も付け加えておく。以後、点数幅に若干の違いはあるが、毎年この基準に従ってクラス分けを行っている。

表 5 2011年度における各学科専攻のクラス分け結果と点数幅

	文学部			発達教育学部		家政学部		現代社会学部	法学部
	国文学科	英文学科	史学科	教育学科	児童学科	食物栄養学科	生活造形学科 生活福祉学科	現代社会学科	法学科
				教育学専攻 心理学専攻	音楽教育学専攻 児童学科				
クラス数	6	5	6	6	6	5	7	9	4
level 1	100-149	124-185	94-143	101-156	94-153	121-170	107-150	98-137	117-175
level 2	149-166	185-205	145-167	159-173	158-175	172-191	150-168	138-158	176-193
level 3	166-179	209-225	168-188	174-185	177-189	192-210	171-185	159-170	194-221
level 4	189-197	225-244	189-200	186-197	189-204	211-229	186-197	171-179	222-272
level 5	198-217	244-286	202-220	198-210	204-227	232-286	198-209	180-187	
level 6	218-268		222-267	211-226	229-272		209-225	188-199	
level 7							226-257	200-213	
level 8								214-230	
level 9								230-271	

※満点は300点で、内訳は語彙が50点、文法50点、リスニング100点

※このプレースメントテスト（ACE PLACEMENT TEST）は学内事情により60分で終わらせること、および TOEIC などとは違い中・高と学習してきた基本的な学力を判断し、結果的に点数が分散されることが期待できる理由で決定した。詳細は大谷・横山・Bradford-Watts（2014）を参照のこと。

5.2. 各コースの授業方針と教科書の内容

特に Reading の授業では「読解の養成と異文化理解」を前提に表 6 の内容を授業の目標としている。

表 6 Reading の各コースの授業目標

Introductory と Intermediate コース
英語圏の文化に関するエッセイを題材とします。そして、自らの文化と英語圏の文化を比較し、その類似点と相違点を確認し、それらの背後にある考え方や価値観を理解します。時にはディスカッションなども取り入れながら、これまであまり意識していなかった文化や価値化について考えます。さらに、まとまった量の英文を素早く、能動的、かつ批判的に読む様々な訓練を行います。キーワード読みやチャンク読みなどの訓練や、英文パラグラフの構造を理解して主題を読み取る訓練などを行います。
Advanced コース
読む活動を通じて国際人として global issue（グローバル [地球規模] の問題）に関心を持ち、自分の意見を持てるような積極的な読み方を大切にします。また、英字新聞独特な文体や語彙・表現の豊かさを味わい、場合によっては英英辞典を活用しながら語彙・表現力を身につける学習法についても随時提示しながら授業を進めます。

教科書は、上記の方針を反映する内容重視の教科書を英語専任教員が各コースごとに2冊を厳選し、そのいずれか1冊を科目担当者が選択する形式をとっている（年度によっては1冊のみ指定のコースもある）。Introductory および Intermediate のコースでは異文化理解や異文化間コミュニケーションを扱った教科書を使い、Advanced コースでは Global Issues を扱った英字新聞の記事を扱った教科書を選定している。いずれも、異文化に対する理解と自国の文化に対する洞察力の涵養に努めている。

5.3. 成績評価の内訳

成績評価は、表7に示すように、Reading および Communication とともに e ラーニング（ALC NetAcademy2）学習に対して30点を占め、前期・後期それぞれ課題学習 Unit の内容理解を確認するために3回の ALC テスト（各10点）を実施している。通常の授業と e ラーニング学習が個別の学習活動として独立してあるのではなく、e ラーニング学習が通常の授業を補完し両輪として機能していることの重さがこの比率を表している。Reading の授業では英文

読解力と内容理解を重視している観点から筆記試験を重視している。一方、Communication の授業では、授業内への学習者の積極的な参加（class participation）とそれに伴う授業内での学習活動を重視していることが、試験と平常点の比率の差を表している。

表7 1年必修英語の成績評価項目と比率

コース	科目	評価項目		比率	
Introductory Intermediate Advanced	Reading	教科書	まとめ（試験）	50点	100点
			平常点	20点	
		e ラーニング	ALC 課題学習（リーディング） TEST 1, 2, 3	30点	
	Communication	教科書	まとめ（試験）	31点	100点
			平常点	39点	
		e ラーニング	ALC 課題学習（リスニング） TEST 1, 2, 3	30点	

5.4. 各コースと課題ユニット範囲の設定

各コースの前期・後期の課題ユニットの範囲は表8のとおりである。短期大学部を併設していた2007年度の後期実施のパイロット・スタディとは異なり、「1レベル」の範囲は除外した。理由は、リメディアル色が強く本学の Introductory コースの学習者に易しすぎる、という点である。結局、リーディングおよびリスニングの学習コンテンツに対して「通常モード」のみを課題とし、Introductory コースでは前期に「2レベル」の10 Units、後期に「3レベル」の10 Units、Intermediate コースでは前期に「3レベル」の10 Units、後期に「4レベル」の10 Units（2008年度から2011年度までは「2レベルの中間」から「4レベル」の中間まで）、Advanced コースでは前期に「4レベル」の10 Units と後期は「5レベル」の10 Units を配分した。「アドバンスモード」は任意とした。

[illegible]

1 年必修英語の通常の授業は、日本語話者と英語話者が接触する際に起こる諸問題について書かれた異文化間コミュニケーションに関する内容の教科書を読むことを基本とし、そのうえで相手の深層文化に理解を示し、更に自国の文化に対する洞察力を深めることを目標としている。しかし、学習者の中には英文読解に困難さを感じている学習者も決して少なくはない。このリーディング・スキルを高める学習支援策として e ラーニング学習を併用している観点から、本学では授業にも取り入れながら活用している。e ラーニングが学習効果を持つためには学習機能を正しく理解し不断の訓練が欠かせないことは言うまでもないが、特に本プログラムで重視されている「チャンク読み」（意味のかたまりを意識した読み方）や「キーワード読み」（内容語を意識した読み方）などの効率よく英文パッセージを読む際の技術や、音声を通じて英文を理解す

る「シャドーイング」(音声反復練習)のメリットを学習者に正しく理解させることは重要なことである。このために、本学では前期に3回、後期に2回、通常授業の教室とは別にコンピュータ教室に移動してALCに特化した学習時間を授業時間数に取り入れている。このALC実習の授業は、コンピュータ教室(Windowsのみ)の稼働率の高さの問題もあり、リーディングの授業担当教員(ALCクラス管理者)が実施する。

前期3回と後期2回のALC実習日は概ね毎年同じ時期に設定している。前期の3回は3回目、7回目、11回目の授業日に、後期の2回は6回目と10回目の授業日を目安としている。特に前期1回目のALC実習日はALC学習の教育面とソフトの機能面についてのオリエンテーションを兼ねている。この実習日の策定にあたっては、前期・後期とも授業開始1週間後の時点における授業での使用稼働率を基に55クラス分の移動表を作成している。コンピュータルームの稼働率によっては特定の曜講時に空き教室が少なかったりする場合もあるが、ALC実習でコンピュータ教室を占有してしまい、学生の自習教室がなくなってしまうことのないように配慮しながら週をずらすことで対応している。(資料2を参照)

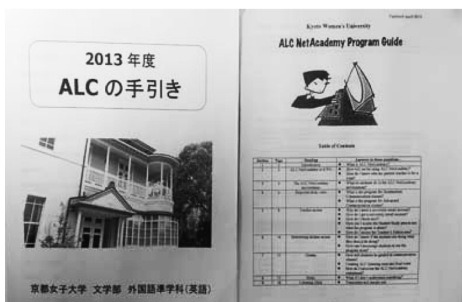
5.6. ALCテストの実施日と問題形式

表7で示したように、ALCテストは3回実施され、各10点で合計30点分を占めている。この比率の高さは、5.5.で述べたように、通常の教科書を使った授業を学習支援するためのeラーニング学習と連動していることの活用であることから、熱心に積極的に課題学習に取り組む学習者の姿勢を相当分評価する本プログラムの特色でもある。こうした学習姿勢を好意的に解釈する意味においても、課題学習ユニットを学習していれば短時間(5分を目安)で実施・採点できるような問題形式を担当者間で共有している。科目担当者と学習者の双方にとって、通常の教科書を使用した授業に加えeラーニング学習が重荷になることの無いようにとの配慮もあり、選択式の問題形式を共有している。(資料3と4を参照)

5.7. ALC マニュアルの作成

本プログラムの運営については非常勤講師（日本人教員とネイティブ教員）との連携は重要である。英語では毎年新学期を迎えるに3月末ないし4月最初に「科目担当者教育連絡会議」を実施している。この会議では単なる報告事項に終

始することなく、通常の授業、ALCの授業、試験問題、評価、授業運営などについて率直に意見交換することで問題と解決策を共有し、授業運営に対する不安を解消することにある。このために特にALC学習については、写真のような日本人教員用とネイティブ教員用の指導マニュアル（『〇〇〇〇年度ALCの手引き』、*ALC NetAcademy Program Guide*；共に約30ページ）を作成し、専任教員と非常勤講師の先生方との意識の共有化に努めている。下記の項目が内容である。



【和文マニュアルの項目】

- ALC 使用の目的
- 本年度の注意点
- ALC の運用方法の概要
- 年間スケジュール
- 課題ユニット
- PC 教室での授業の教案
- 先生方に特にご注意ください点
- 成績評価
- 管理画面へのアクセス方法
- ALC テストサンプル
- リーディングテスト作成のための、本文ダウンロード手順
- クラス担当者とペアの先生

- ・ ALC の「TOEIC テスト演習」
- ・ FAQ（よくある質問）
- ・ 連絡先

【英文マニュアルの項目】

Heading	Answers to these questions...
Introduction	<ul style="list-style-type: none"> ● What is ALC NetAcademy?
ALC NetAcademy at KWU	<ul style="list-style-type: none"> ● How will we be using ALC NetAcademy? ● How do I know who my partner teacher is for a class?
The ALC NetAcademy environment	<ul style="list-style-type: none"> ● What do students do in the ALC NetAcademy environment?
Required study units	<ul style="list-style-type: none"> ● What is the program for Intermediate Communication classes? ● What is the program for Advanced Communication classes?
Teacher access	<ul style="list-style-type: none"> ● Why do I need a university email account? ● How do I get a university email account? ● How do I check mail? ● How can I access the Student Study area to see what the program is about? ● How do I access the Teacher's Admin area?
Monitoring student access	<ul style="list-style-type: none"> ● How do I know if the students are doing what they should be doing? ● How can I encourage students to use the program more?
Grades	<ul style="list-style-type: none"> ● How will students be graded in communication classes? ● Creating ALC listening tests and final exam ● How do I calculate the ALC NetAcademy component?
Help!	<ul style="list-style-type: none"> ● What if I don't understand something?
Listening Units	<ul style="list-style-type: none"> ● Transcripts

6. 2008年度から2013年度の ALC 授業評価アンケートの結果

6.1. 授業評価アンケートの設問項目

ALC の使用については、毎年、学生にアンケート調査を行い、その結果に基づきプログラムの改良を行っている。ALC に特化した授業評価アンケートは学内 Web サイト内の KWIINS CLASS を利用して前期・後期の学期末に2回実施している。その後、情報システムセンターに各学部・学科・専攻ごとにデータの抽出集計の協力をお願いし、英語が各設問ごとの年回推移表を作成している。以下の12個の設問がとりわけ重要であることから、本報告書ではこれらの設問に限って報告する。また、番号はそのままとする。

【設問】

- Q 13. 通常の授業に加えて学習することで、読む力が伸びていると感じる。
- Q 17. 通常の授業に加えて学習することで、聴く力が伸びていると感じる。
- Q 18. 課題ユニットの数は適切だった。
- Q 19. 課題学習に意欲的に取り組んだ。
- Q 20. 一度に集中して課題学習をするのではなく、計画的に取り組んだ。
- Q 24. 今後も通常の授業に加えて、こうしたコンピュータを活用した学習を続けたい。
- Q 25. 担当教員は毎週の授業で ALC の進捗状況の確認と質問を受けつけた。
- Q 26. 担当教員から ALC の進捗状況について随時メールで連絡があった。
- Q 27. ALC の管理者からの「お知らせ」は随時確認した。
- Q 28. 通常の授業と ALC の学習との関連性について理解できた。
- Q 29. ALC を学習することで、総合的な学力が身についた。
- Q 30. ALC を学習することで、TOEIC のスコア・アップへつながると感じる。

6.2. 設問項目の集計結果

回答スケールは A、B、C、D、E、F とし、数値は全学部・全学科の合計の数値（%）を表している。回答スケールの内訳は以下のとおりである。

A：全くそう思わない、B：そう思わない、C：どちらでもない、

D：そう思う、E：非常にそう思う、F：未回答

以下に12個の設問ごとに、2008年度から2013年度までの 1)基本データ、2)各スケールの年間推移、3)肯定的な回答（D と E）のみを抽出した年間推移、の3つの集計結果を提示する。

Q 13. 通常の授業に加えて学習することで、読む力が伸びていると感じる。

表 9 各設問項目に対する回答
スケールの比率と肯定
的回答 (D+E) の比率

	A	B	C	D	E	F	(D + E)
2008前期	3.8	16.3	37.2	36.7	5.1	0.9	41.8
2008後期	5.6	17	38.1	33	5.2	1	38.2
2009前期	2	11.6	35.7	40.9	8.5	1.3	49.4
2009後期	3.2	16.5	34.9	38	5.8	1.5	43.8
2010前期	1.8	9.4	36.1	40.5	9.5	2.7	50
2010後期	2.4	10.2	32.9	41.8	9.3	3.5	51.1
2011前期	2.1	9.3	36.7	40.1	9.1	2.7	49.2
2011後期	3.2	11	34.1	40.1	7.4	4.2	47.5
2012前期	2.3	7.1	31.9	45.7	10.1	3	55.8
2012後期	2	8	30.4	44.1	12.1	3.4	56.2
2013前期	1.3	8.9	33.7	43.3	10	2.9	53.3
2013後期	1.6	9.3	30	45.3	9.3	4.6	54.6

A 全くそう思わない D そう思う
B そう思わない E 非常にそう思う
C どちらでもない F 未回答

図 2 各設問項目の年間推移

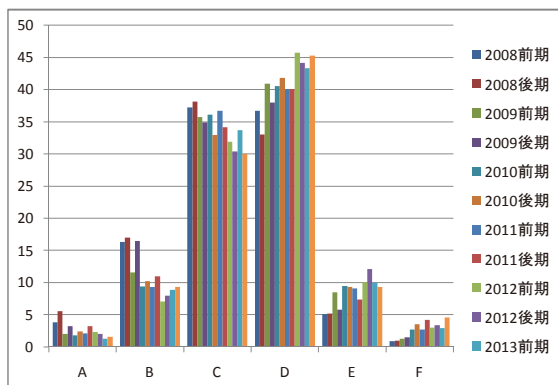
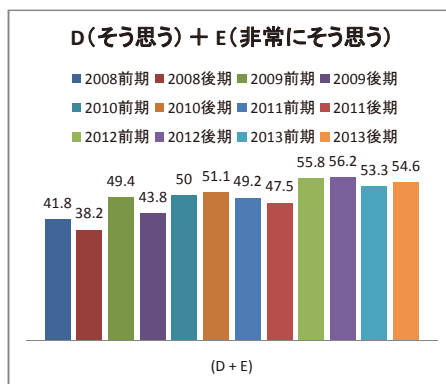


図 3 肯定的回答 (D+E) のみ
を抽出した年間推移



Q 17. 通常の授業に加えて学習することで、聴く力が伸びていると感じる。

表10 各設問項目に対する回答
スケールの比率と肯定
的回答 (D+E) の比率

	A	B	C	D	E	F	(D + E)
2008前期	3	13	32.5	41.9	8.9	0.8	50.8
2008後期	5.2	13.4	34	40.1	6.3	1.1	46.4
2009前期	1.5	11.7	31	42.4	11.1	2.3	53.5
2009後期	2.6	14.3	32.7	41.6	6.8	2	48.4
2010前期	2	8.5	31.6	44.8	10.5	2.7	55.3
2010後期	3	10.8	29.3	44.6	9.6	2.7	54.2
2011前期	1.8	8.8	33.6	44	10.4	1.4	54.4
2011後期	2.5	11.6	32.8	41.5	8.4	3.1	49.9
2012前期	1.9	7.7	28.2	50	9.8	2.4	59.8
2012後期	2	8.4	29	46	11.5	3	57.5
2013前期	1.6	8.3	29.3	47.9	10.3	2.6	58.2
2013後期	1.8	8.5	28.2	48.3	9.3	4	57.6

A 全くそう思わない D そう思う
B そう思わない E 非常にそう思う
C どちらでもない F 未回答

図 4 各設問項目の年間推移

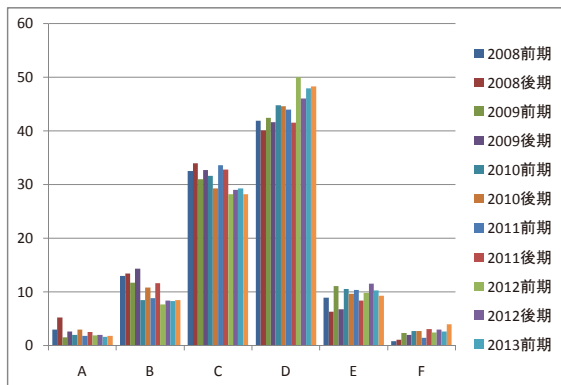
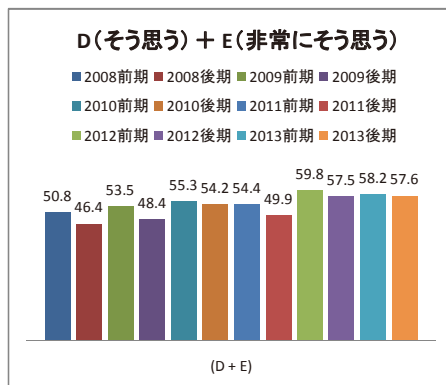


図 5 肯定的回答 (D+E) のみ
を抽出した年間推移



Q 18. 課題ユニットの数は適切だった。

表11 各設問項目に対する回答
スケールの比率と肯定
的回答（D+E）の比率

	A	B	C	D	E	F	(D + E)
2008前期	2.1	9.5	25.1	56.3	6.4	0.6	62.7
2008後期	2.8	10.7	30.1	49.5	6.3	0.6	55.8
2009前期	1.2	6.2	20.9	59.7	11.6	0.4	71.3
2009後期	1.3	11.7	25.7	54.3	6.3	0.6	60.6
2010前期	0.9	4.9	22.2	57.9	13.4	0.8	71.3
2010後期	1.3	5.1	24.4	58	10.6	0.6	68.6
2011前期	1.4	4.4	21.3	60.6	11.8	0.5	72.4
2011後期	1.9	6.2	25.6	56.2	9.6	0.6	65.8
2012前期	0.9	5.6	18.3	60.8	13.7	0.7	74.5
2012後期	0.9	4.2	19.8	61.9	12.6	0.7	74.5
2013前期	0.6	3.8	19.7	62.1	13.1	0.6	75.2
2013後期	1.1	5.5	18.8	60.7	13	0.9	73.7

A 全くそう思わない

B そう思わない

C どちらでもない

D そう思う

E 非常にそう思う

F 未回答

図 6 各設問項目の年間推移

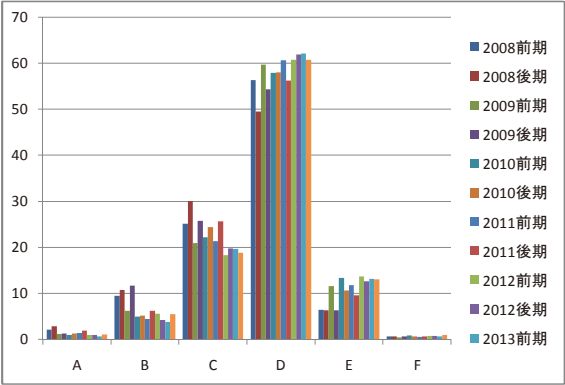
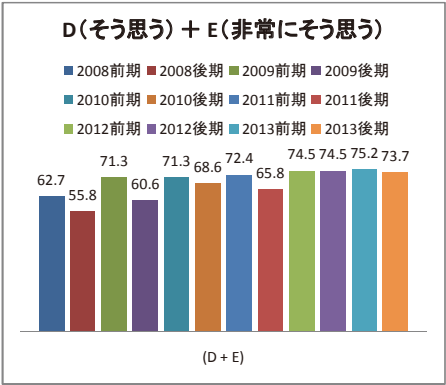


図 7 肯定的回答（D+E）のみ
を抽出した年間推移



Q 19. 課題学習に意欲的に取り組んだ。

表12 各設問項目に対する回答スケールの比率と肯定的回答 (D+E) の比率

	A	B	C	D	E	F	(D + E)
2008前期	58.6	5.6	6.1	22.4	6.6	0.6	29
2008後期	68	4.2	7.2	14.3	5.7	0.6	20
2009前期	13.4	12.7	14.8	11.5	47.4	0.2	58.9
2009後期	13.1	10.2	15.6	6.9	53.7	0.5	60.6
2010前期	7.5	16.1	12.7	9.9	53.2	0.6	63.1
2010後期	7.9	9.8	14.8	11.1	55.9	0.5	67
2011前期	10.2	18.9	11.8	11.3	47.3	0.5	58.6
2011後期	6.9	12.9	13	9.5	57.2	0.4	66.7
2012前期	13.4	13.9	12.4	14.6	45	0.7	59.6
2012後期	11.2	8	15	12.7	52.4	0.8	65.1
2013前期	10.7	17.7	10.8	14.6	45.4	0.6	60
2013後期	8.5	14.8	17	9.4	49.7	0.6	59.1

A 全くそう思わない D そう思う
 B そう思わない E 非常にそう思う
 C どちらでもない F 未回答

図 8 各設問項目の年間推移

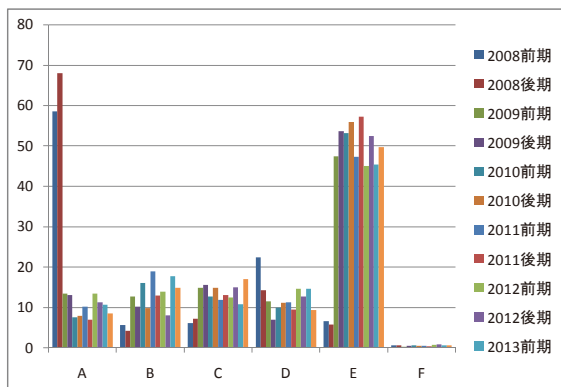
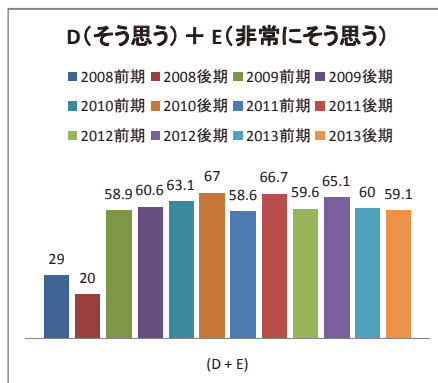


図 9 肯定的回答 (D+E) のみを抽出した年間推移



Q 20. 一度に集中して課題学習をするのではなく、計画的に取り組んだ。

表13 各設問項目に対する回答
スケールの比率と肯定
的回答（D+E）の比率

	A	B	C	D	E	F	(D + E)
2008前期	17.3	35.2	23.4	19.2	4.4	0.5	23.6
2008後期	28.8	34.8	18.2	13.4	3.7	1.1	17.1
2009前期	10.2	33.2	27	23.8	5.4	0.3	29.2
2009後期	21.2	36.8	21.1	17.3	2.8	0.8	20.1
2010前期	12.1	29.3	28.1	23	6.2	1.3	29.2
2010後期	14.1	32.3	24.1	22.1	5.8	1.6	27.9
2011前期	11.4	30	27	25.2	6	0.4	31.2
2011後期	15.3	35.7	24.1	20	4.3	0.6	24.3
2012前期	11.5	26.2	25.9	28.1	7.3	1.1	35.4
2012後期	12.3	31.1	25.3	22.5	7.8	0.9	30.3
2013前期	10.6	26.9	28.6	26	7.2	0.6	33.2
2013後期	12	29.1	25.1	27	6.1	0.7	33.1

A 全くそう思わない

B そう思わない

C どちらでもない

D そう思う

E 非常にそう思う

F 未回答

図10 各設問項目の年間推移

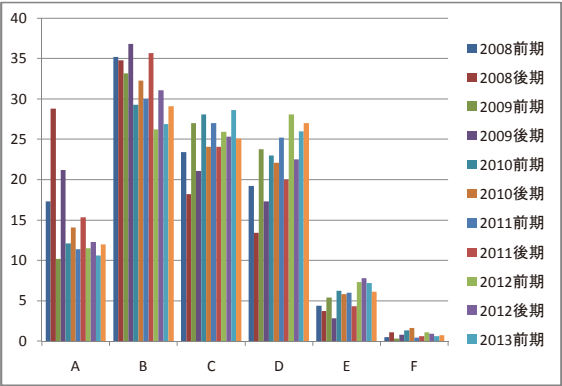
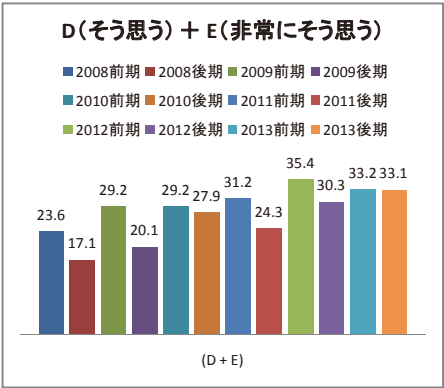


図11 肯定的回答（D+E）のみ
を抽出した年間推移



Q 24. 今後も通常の授業に加えて、こうしたコンピュータを活用した学習を続けたい。

表14 各設問項目に対する回答スケールの比率と肯定的回答（D+E）の比率

	A	B	C	D	E	F	(D + E)
2008前期	10.1	14.7	30.2	35	9.3	0.7	44.3
2008後期	11.7	16.2	34	30.3	6.9	0.8	37.2
2009前期	8	14.8	32.7	32.9	11.4	0.3	44.3
2009後期	8.9	21.5	33.5	30.4	5.1	0.6	35.5
2010前期	3.4	11.6	30.7	40.1	13	1.2	53.1
2010後期	4.7	12.8	31	41	9.4	1.2	50.4
2011前期	4.7	11.8	30.7	37.9	14.2	0.5	52.1
2011後期	5.6	10.7	32.6	40.6	9.6	0.9	50.2
2012前期	3.1	10.2	27.7	43.7	14.4	0.9	58.1
2012後期	5.2	10.5	29.2	43.2	10.7	1.2	53.9
2013前期	3.7	9.5	29.9	43.7	12.6	0.6	56.3
2013後期	3.9	10.9	29.7	43.9	11	0.6	54.9

A 全くそう思わない D そう思う
 B そう思わない E 非常にそう思う
 C どちらでもない F 未回答

図12 各設問項目の年間推移

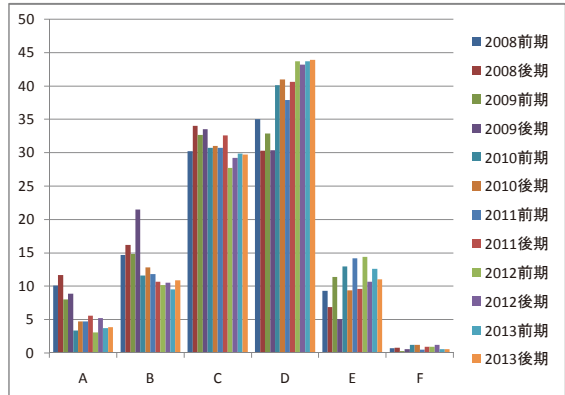
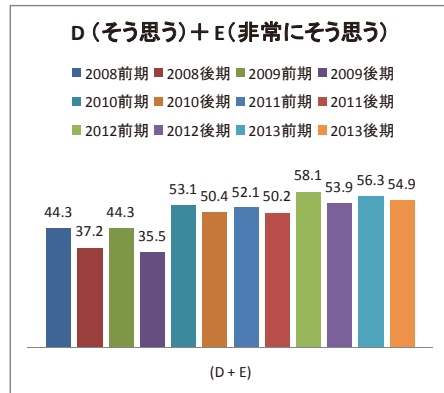


図13 肯定的回答（D+E）のみを抽出した年間推移



Q 25. 担当教員は毎週の授業で ALC の進捗状況の確認と質問を受けつけた。

表15 各設問項目に対する回答
スケールの比率と肯定
的回答 (D+E) の比率

	A	B	C	D	E	F	(D + E)
2008前期	9.1	15.2	26.5	37.9	10.6	0.8	48.5
2008後期	10.6	18.2	29.9	32.6	7.7	1	40.3
2009前期	5.7	15.9	28.4	35.3	14.1	0.6	49.4
2009後期	5.8	17.3	28	38.7	9.5	0.8	48.2
2010前期	3.4	15.4	28.8	38	13.2	1.2	51.2
2010後期	5.6	14.3	26.6	39.8	12.7	1.1	52.5
2011前期	5.3	16	27.4	36.4	13.7	1.2	50.1
2011後期	5.7	14.4	30.9	37	11	1	48
2012前期	4.8	10.2	31.8	38.9	13.2	1.1	52.1
2012後期	5.6	14.2	30.2	36.3	13.1	0.6	49.4
2013前期	4.6	12.6	31.1	39.2	11.7	0.9	50.9
2013後期	4.2	13.6	28.7	42	10.5	1	52.5

A 全くそう思わない D そう思う
B そう思わない E 非常にそう思う
C どちらでもない F 未回答

図14 各設問項目の年間推移

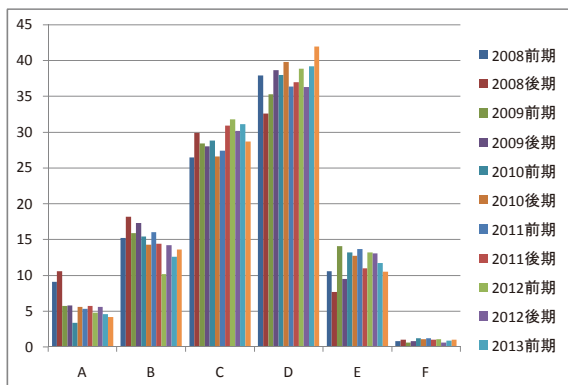
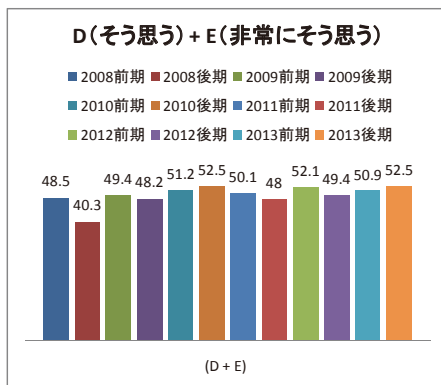


図15 肯定的回答 (D+E) のみ
を抽出した年間推移



Q 26 担当教員から ALC の進捗状況について随時メールで連絡があった。

表16 各設問項目に対する回答
スケールの比率と肯定
的回答 (D+E) の比率

	A	B	C	D	E	F	(D + E)
2008前期	18.5	18.9	24.5	30.1	7.3	0.6	37.4
2008後期	16	25	32.3	21.4	4.6	0.7	26
2009前期	15.6	18.8	21.4	28.4	15.3	0.6	43.7
2009後期	16.2	23.4	22	26.9	10.9	0.6	37.8
2010前期	12.1	18.9	20.8	29	18.5	0.6	47.5
2010後期	10.6	16.2	20.9	33.9	17.4	1	51.3
2011前期	12.7	15.5	21.3	31.8	18	0.7	49.8
2011後期	11.2	21	24.9	26.8	15.5	0.6	42.3
2012前期	12.5	17.9	30.7	27.3	10.8	0.8	38.1
2012後期	12.4	20.1	25.4	26	15.4	0.7	41.4
2013前期	15.4	19.6	25.7	26.3	12.6	0.4	38.9
2013後期	12.5	18.3	30	28.3	10.4	0.5	38.7

A 全くそう思わない D そう思う
 B そう思わない E 非常にそう思う
 C どちらでもない F 未回答

図16 各設問項目の年間推移

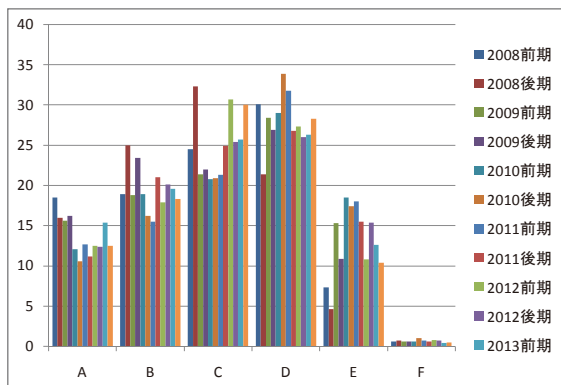
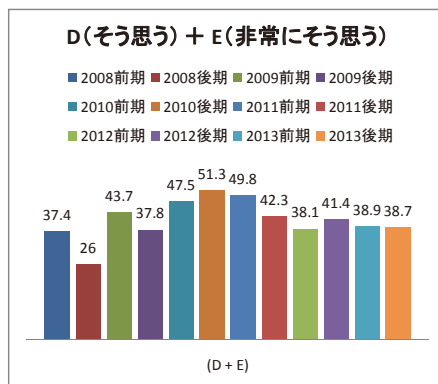


図17 肯定的回答 (D+E) のみ
を抽出した年間推移



Q 27. ALC の管理者からの「お知らせ」は随時確認した。

表17 各設問項目に対する回答
スケールの比率と肯定
的回答（D+E）の比率

	A	B	C	D	E	F	(D + E)
2008前期	9.5	21.7	24.6	33.8	9.6	0.8	43.4
2008後期	12.5	26.9	25.4	27	7.4	0.8	34.4
2009前期	5.4	17	23.8	40.2	13.2	0.4	53.4
2009後期	6.2	17.8	23.7	43.1	8.9	0.3	52
2010前期	4.6	13.4	20	43.4	17.7	1	61.1
2010後期	3.9	13	21.8	45.4	14.6	1.3	60
2011前期	5.9	14.1	18.4	42	18.5	1	60.5
2011後期	6.7	17.8	20.3	42.9	11.8	0.3	54.7
2012前期	7.1	13.1	21.2	41.2	16.2	1.1	57.4
2012後期	7.7	17.1	20.6	39.4	14.4	0.8	53.8
2013前期	7.1	14.1	23.9	39	15.2	0.7	54.2
2013後期	8	16.5	25.9	37.7	11.3	0.5	49

A 全くそう思わない

B そう思わない

C どちらでもない

D そう思う

E 非常にそう思う

F 未回答

図18 各設問項目の年間推移

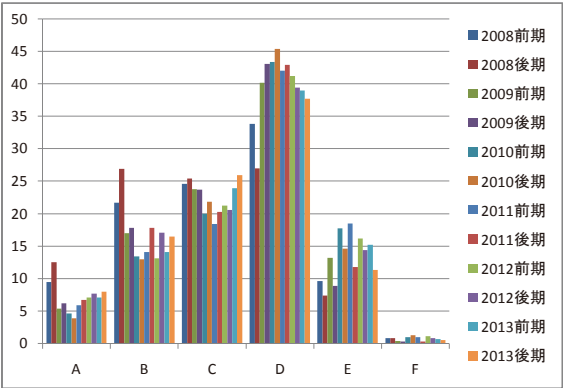
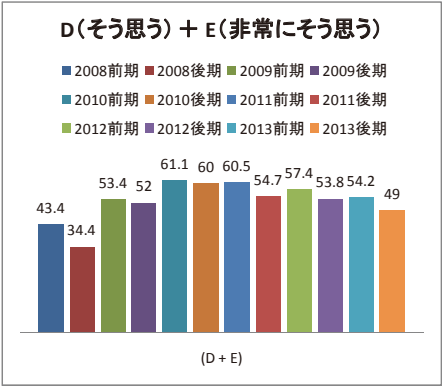


図19 肯定的回答（D+E）のみ
を抽出した年間推移



Q 28. 通常の授業と ALC の学習との関連性について理解できた。

表18 各設問項目に対する回答
スケールの比率と肯定
的回答 (D+E) の比率

	A	B	C	D	E	F	(D + E)
2008前期	8.3	26.2	37.2	24.1	3.1	1.2	27.2
2008後期	9.3	25.1	37.9	23.6	3.4	0.8	27
2009前期	4.4	19.6	37.4	32.1	6	0.4	38.1
2009後期	5.7	23.9	36.9	29.2	3.3	1	32.5
2010前期	2.8	15.5	41.1	32.6	6.4	1.6	39
2010後期	4.2	12.5	37.3	36.7	7.1	2.3	43.8
2011前期	3.6	15.1	36.2	37.1	6.7	1.2	43.8
2011後期	4.9	15.8	36.3	36.5	5.1	1.4	41.6
2012前期	3	12.7	33.5	40.8	8.8	1.1	49.6
2012後期	4.8	13.2	33	39.8	8.4	0.9	48.2
2013前期	3.6	14.6	35.1	39.1	6.5	1.1	45.6
2013後期	4	13.7	34	39.8	7.5	1	47.3

A 全くそう思わない D そう思う
 B そう思わない E 非常にそう思う
 C どちらでもない F 未回答

図20 各設問項目の年間推移

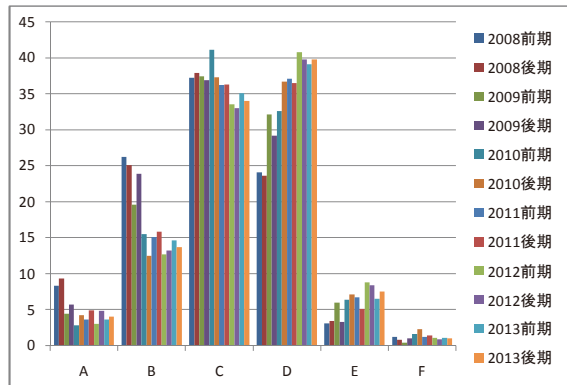
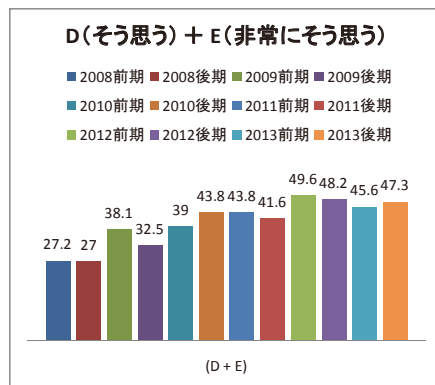


図21 肯定的回答 (D+E) のみ
を抽出した年間推移



Q 29. ALC を学習することで、総合的な学力が身についた。

表19 各設問項目に対する回答
スケールの比率と肯定
的回答 (D+E) の比率

	A	B	C	D	E	F	(D + E)
2008前期	5.9	16.3	38.1	34.4	4.5	0.7	38.9
2008後期	6.6	18	39.1	32.6	3.2	0.6	35.8
2009前期	2.9	13.8	35.6	40.5	6.2	1	46.7
2009後期	4.1	16.7	37.1	37.2	4.5	0.4	41.7
2010前期	2.5	9.2	38.3	42.3	6.8	0.9	49.1
2010後期	3.3	10.5	34.4	43.7	7.6	0.5	51.3
2011前期	3.1	9.6	36	42.4	8	0.9	50.4
2011後期	4.1	11.9	34.6	43.9	4.9	0.6	48.8
2012前期	2.9	8.4	31.9	47.3	8.2	1.3	55.5
2012後期	3.7	9.9	31.4	44.4	9.7	1	54.1
2013前期	2.8	8.3	35.6	45.2	7.4	0.6	52.6
2013後期	2.4	8.8	32.7	46.9	8.1	1	55

A 全くそう思わない D そう思う
B そう思わない E 非常にそう思う
C どちらでもない F 未回答

図22 各設問項目の年間推移

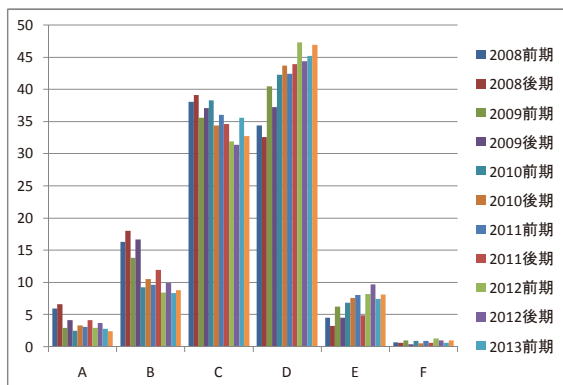
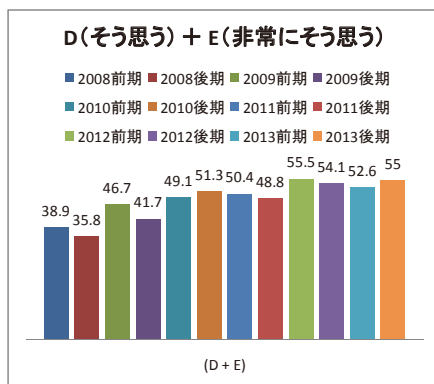


図23 肯定的回答 (D+E) のみ
を抽出した年間推移



Q 30. ALC を学習することで、TOEIC のスコア・アップへつなぐとを感じる。

表20 各設問項目に対する回答
スケールの比率と肯定
的回答 (D+E) の比率

	A	B	C	D	E	F	(D + E)
2008前期	5.9	16.3	31.3	39.9	5.9	0.7	45.8
2008後期	6.7	14	31.9	41.3	5.5	0.6	46.8
2009前期	4.7	18	34.1	36.2	6.5	0.5	42.7
2009後期	5.7	19.8	33.5	35.1	5	0.9	40.1
2010前期	3.1	11.5	37.2	39.2	8.2	0.8	47.4
2010後期	5.1	10.7	33.2	42.5	7.7	0.7	50.2
2011前期	3.1	9.6	36	42.4	8	0.9	50.4
2011後期	5.3	13.4	31	43.3	5.8	1.2	49.1
2012前期	3.2	10.4	33.4	43.8	8.6	0.7	52.4
2012後期	3.7	12.1	30.9	41.6	10.8	0.9	52.4
2013前期	3.6	11.6	34.6	41.8	7.4	1	49.2
2013後期	3.1	10.3	31.7	45.6	8.3	0.9	53.9

A 全くそう思わない D そう思う
B そう思わない E 非常にそう思う
C どちらでもない F 未回答

図24 各設問項目の年間推移

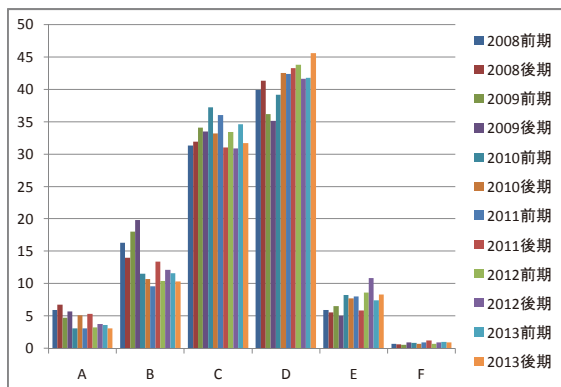
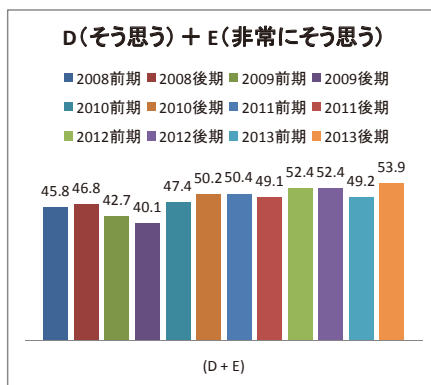


図25 肯定的回答 (D+E) のみ
を抽出した年間推移



6.3. 自由記述の意見

自由記述の意見としては、6年間分（12セメスター分）と膨大であり、しかもセメスターによって意見の大きな多様性は見いだせない。便宜上2013年度の前期・後期分について、特に否定的な意見のみを以下に抽出する。また、明らかに通常の授業に関する回答は削除した。重複している内容の回答は一方を削除した。

1. 英語のレベルが低い。受験英語よりも量はすくない、記述もない、ものたりない。
2. このような授業では TOEIC のスコアが上がることはないし、ALC もレベルが中学英語ぐらいだし、確認テストもそんなに必死にやるほどのものではないし、少し「いい加減にやっていた部分があった。ただ座ってるだけの授業だった。語学は自分で勉強しなければ、足りないなと思っている。
3. 寮生は ALC やる気があるのに寮のパソコン室の予約にあぶれたとき泣ける。一番上のクラスの人が頑張って成績 C で一番下のクラスの人が適当にやって成績 A とかになったら悲しいです。
4. リスニングなどは PC からのほうが便利だが、PC 学習は目が疲れ肩が凝るので、リーディングなどの PC 学習は考え直してほしいです。
5. ALC の学習記録がつかなくて困った。リーディングとリスニングのテストが近いと、一気にやる量が増えて大変だった。おしらせはメール配信などでわかりやすくしたほうがいいと思った。
6. 会話力やコミュニケーション能力を強化しようとしているのはわかるけれど、高校の授業よりもレベルが低くて ALC で学習している TOEIC の点数が下がってしまった。もっと会話をさせたいなら、日本語は絶対話さない、机の隊形を変えるなど工夫が必要だと思います。会話力を UP させるのも悪くはないですが、高校の英語力を持続させるためにも TOEIC で点数を上げるコツのほうが学びたいです。
7. ALC のリスニングは聴きにくくて、ノーマルだとおそいから速くすると語尾がブツンときれてばかりで聴きにくさが増した。ノーマルは遅くてイラ

イラした。

8. ALC のリーディングで単語の辞書登録ができるが、そのシステムは登録画面をいちいち開いたり閉じたりしなくてはならず、非常に不便であった。
9. ALC の履歴が何度も消えて、何度もやり直すことがあった。また、学習終了マークがつかない時もあり、不備が多かったように思う。
10. 英語の発音があまり綺麗じゃないので、なまっているように聞こえる。ALC は頭も肩も痛くなるのでやめてほしい。ALC の印刷と単語帳の機能の充実をはかってほしい。
11. ALC をする必要性が感じられなかった。
12. 学外からの学習をしたことがありません。
13. 学外からのアクセスはできませんでした。
14. スマートフォンからでも利用できたらいいと思う。ALC の本文は印刷するときに一部分を切り取ることが出来なかったのが不便だった。
15. ALC の記録が残らないことが多々あり、同じユニットを記録が残るまで何度も学習しました。
16. ALC が自分にとってプラスになったとは思えない。やっつけ仕事だった。
17. リスニングのみ発音の悪い英語が混ざっていたり、音声の後ろで音楽が流れていたりして非常に聞きにくかった。その点では、あまり意味のある学習だとは思わない。

6.4. 考察と課題

6.4.1. スケールによる設問項目

以下、肯定的なスケール値である D（そう思う）と E（非常にそう思う）の合計した数値に着目し各設問項目を考察する。

Q13と Q17については、過半数以上の学習者が e ラーニング学習が読む力と聴く力を後押ししてくれていると実感していることは好意的な数値ではあるが、学習支援システムとしてのツールの側面からすれば、もっと高い数値が望まれる。特に Reading の授業では、教科書の内容について議論する前の読解作業

において、ALC NetAcademy2 の最大の学習機能である「チャンク読み」と「キーワード読み」の積極的な授業への統合練習は意識して授業運営に取り入れることが強く望まれる。例えば、毎回の授業で教科書の一段落を取り上げてこれらの機能を意識した読解作業をすることだけでも e ラーニングの効果を理解してくれるはずである。

Q18については、70%以上の高い比率が各学期の課題学習ユニット数がリーディングとリスニングを合わせて10ユニットであることの妥当性を示しており、e ラーニング学習が通常の授業以外に大きな負担となっているとは言えない。

Q19と Q20はお互いに連動していると考えられる。Q19については、導入当時の2008年度を除き、それ以後の5年回は60%前後の横ばいが続いている。ALC の課題学習状況と ALC テストは成績評価の30%を占めていることを考えれば、もう少し積極的な学習意欲がこの数値に反映されるべきだと考える。管理画面で学習履歴を観察すると、課題ユニットの学習日は ALC テストの数日前から前日に集中していることがわかる。継続学習が集中学習となっている傾向は否定できない。この理由として、1)課題学習期間が各クラスごとに学習期間を設定できないシステム上の問題、2)ALC 学習が訓練を要求していることと ALC テストの問題形式が記述式ではなく空所補充問題や選択問題であることの差 (5.6.参照) が考えられる。クラスごとに独自の学習期間を設定することの可能性を探ること、および語学学習 (特にスキル面) は継続学習が肝要であることを学習者により認識してもらうことで、今以上の数値は期待できる。

Q24については、2008年度および2009年度の導入当初2年間と比較すれば10%ほど数値は上昇している。しかし、この設問は通常の授業に加えて e ラーニング学習することの本プログラムと連動していることから、より高い数値が望まれる。通常の授業の予習・復習に加えて定期的に課題ユニットを学習しなければならない負担も要因と考えられる。

Q25と Q26の設問は、担当教員 (ALC 管理者) と学習者とのコミュニケーションを図ろうとする姿勢を表すものである。e ラーニング学習が成功するた

めには、担当教員が学習履歴を確認し、適宜指導し、逆に学習者からの質問に答えることで意思疎通を図ることが強く求められる。全体的に50%前後という数値は決して高い数値とは言えない。ALC NetAcademy2 では「励ましメール」の機能を使い学習者とのコミュニケーションを密に取ることができる。担当教員が学習履歴を確認しこの機能を実践することは負担がかかることは事実であるが、今以上に実践してもらうことでこの数値は確実に上がると思われる。

Q27の数値も決して高いとは言えない。この「お知らせ」機能は、担当教員が担当しているクラスの学習者全員に、あるいは ALC 管理者が1年必修英語を履修している全員に共通する情報として ALC 学習画面のトップ画面に配信設定できるものである。しかし、このお知らせを確認するためには ALC を軌道させる必要があることから、学習者の課題学習の学習状況や時期に左右される不便さがある。Q20や Q25と Q26の数値と連動しているとも言える。

Q28について、この設問はeラーニング学習が教科書を使った通常の授業をスキルの面で支援することが実感しきれていないことを露呈している。緩やかな数値の上昇は感じ取れるが、本プログラムの根幹とも言えるものである点からすれば、50%に満たないことは学習者の積極的な心的態度は反映していないと言わざるを得ない。ALC のオリエンテーションでの説明および通常の授業での「チャンク読み」、「キーワード読み」、「シャドーング」などの学習機能の活用練習を地道に毎回の授業に積極的に取り入れることで、通常の授業と ALC 学習との関連性を理解させることに努める必要がある。

Q29は総合評価とも言える。Q18以外の全ての設問について、D と E の総計数値が少なくとも60%以上になれば、この設問の数値も結果として伸びると思われる。特に Q28との相乗効果が期待される。学習者が授業を通じて ALC 学習の訓練をすることでスキルが身につくことのメリットを実感してもらえ授業運営が強く求められる。

Q30の設問は1年必修英語の Reading と Communication の授業を直接支援する学習コンテンツではないことをまず記載する必要がある。本eラーニング学習を通じて読む・聴くのを積み重ねた学習経験が TOEIC などの客観的

な運用能力を測定する試験にどう反映するのか、学習者の心的態度の変化を見ている。これについては、次の6.4.2.で述べる。

6.4.2. 自由記述の意見に対して

教科書を使用した通常授業の学習を支援するものとして *ALC NetAcademy2* を併用活用する際にもっとも重要なことは、学習者にその関連性を正しく理解させることは言うまでもない。この点については、毎年3月末ないし4月初めの授業開始前に実施している科目担当者教育連絡会議において、*ALC* マニュアルと *ALC* 授業評価アンケート集計表を配布しながら特に重視している点でもある。この点については、6.2.の Q28の数値にも反映されていると言える。D（そう思う）と E（非常にそう思う）を合わせた2008年度から2013年度までの6年間では、わずかではあるが右肩上がりの傾向がある。しかしこの設問項目は本プログラムのeラーニング学習の根幹であることから、6.4.1.で上述したように、各機能の授業への積極的な取り入れることを担当教員間で共有することが何よりも大切なことである。

TOEICに関連した自由記述も多く見られた。本ソフトにはリーディングとリスニングに加え「TOEIC テスト演習」の学習コンテンツが10回分含まれている。表7に示したように、この演習問題は評価の一部を占めるものではないが、学年始めと学年終わりの時期に「TOEIC テスト演習 No.1」と「TOEIC テスト演習 No.4」をテストモード（実際の試験の4分の1の縮尺版で、990点満点に換算される）で受験することを求めている。しかし、学習者には、1) 評価に組み込まれない、2) 対策の仕方もわからず点数もあまり伸びない、3) 授業との関連性を見いだせない、などの理由から否定的な意見が見られた。もちろん、1年必修英語の学習目的はTOEICの点数を上げることではないが、今後このコンテンツを学習させることの議論は必要である。

ALC の内容が易しすぎるという意見も決して少なくはない。表5と表9に示したように、*ALC* の課題学習ユニットは入学時のプレースメントテストの成績に応じてコースを決定しており、教科書と課題学習ユニットの難易度も傾

斜配分している。不満を持つ学習者がどのコースなのかは特定できないが、Introductory ないし Intermediate の前半のレベルである可能性はある。学習コンテンツの 1 レベルから 5 レベルまでの中で、3 レベルが中間であり、Introductory の開始レベルも 2 レベルからとしている。しかし、ここで留意しなければならないのは本ソフトの最大の学習機能面である「チャンク読み」、「キーワード読み」、「シャドーイング」の学習機能とその期待される学習効果について学習者に正しく理解されていないのではないかと思われることである。受験のような難易度の高い文章をどう訳読するかではなく、学習機能を活用して限られた時間内で効率のよい読み方と聴き方を「練習する」ことに重きが置かれていることを改めて理解させる必要がある。

これらの意見に加え、学習記録が正しく残らない、専門科目の勉強で e ラーニングまで余裕がない、画面で学習することの e ラーニングの面倒さ、スマートフォン対応や Mac 対応にしてほしい、などの意見もあることも付け加え、今後の改善策を模索したい。

7. まとめ

ALC NetAcademy2 は、学習コンテンツを ALC 教育社が、システム開発を日立ソフトウェアエンジニアリング株式会社が担当し共同開発した e ラーニング教材である。しかし、当初本商品が発売された頃と比較して、今日では幅広い教育現場や企業内英語研修の学習支援策の一つとして導入活用されてきている。大学を例にみれば、個人が担当する英語の授業から学科・学部を越え全学的な活用まで、その広がりを見せている。これにより多くの現場からカスタマイズして欲しいとの要求の高まりを見せ、近い将来、学習コンテンツ、学習機能、管理画面、Mac 使用、スマホ対応など、現場のニーズに応えるべく大きなバージョンアップ作業が行われていると聞いている。

英語教室としては、6 年間の貴重な各種データを真摯に受け止め、e ラーニングを含めた全学共通科目としての本学の教養外国語（英語）教育のあり方を、

対教育効果の面から反省し、継続プログラムとして考えていきたい。

謝辞

本 e ラーニング教材、*ALC NetAcademy2*（スーパースタANDARD コース）導入し際し、当時の教務部長兼導入検討委員会委員長であった土井幸雄先生と外国語教室の愛甲弘志先生、および情報システムセンター課長の清水和信氏にまず感謝を申し上げなければならない。土井先生には e ラーニング学習を含め学科の垣根を越えた外国語学習の大切さと本システムの導入に深い理解を示していただきました。愛甲先生にはこのプログラムを実現させるために確かな道筋と様々な側面から叱咤激励をいただきました。清水課長には何回にも及ぶ業者との打合せやネットワーク等の面から限らないご指導をいただきました。三人のお力添えがなければ、このプログラム導入はなかったと言えます。株式会社アルク教育社大阪支店の本学担当の杉原理絵氏と勝山貴生氏には他大学での活用事例や各種資料をご提供いただきました。特に杉原氏には、2008年度導入時において前期 1 回目の ALC 実習（オリエンテーション）には可能な限り非常勤講師の多くの授業にアシスタントとしてサポートしていただきました。最後に、授業を通じてこのプログラムにご理解と多大なご協力をいただいた非常勤の先生方に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 大谷麻美・横山仁視・Kim Bradford-Watts (2014). プレースメントテストによる習熟度別クラス編成に関する報告書—全学共通言語コミュニケーション科目の英語における事例—、『人文論叢』、京都女子大学人文学会、第62号、27-50.
- 門田修平(監修・著) (2007). 『シャドーイングと音読』、コスモピア株式会社.
- 門田修平 (2012). 『シャドーイング・音読と英語習得の科学：インプットからアウトプットへ』、コスモピア株式会社.
- 株式会社アルク教育社 (2009). 『英語教育と e-learning 活用事例集』.
- 京都女子大学外国語準学科 (2014). 『IRIS イーリス 2014 言語コミュニケーション科目の手引き』 (未刊行の手引書).
- 京都女子大学外国語準学科英語教室 (2014). 『2014年度 ALC の手引き』 (未刊行

- の手引書).
- 京都女子大学外国語準学科英語教室 (2014). *ALC NetAcademy Program Guide* (未刊行の手引書).
- 玉井健 (1998). 「シャドーイングの背景理論と評価法」『シャドーイングの応用研究』、日本時事英語学会関西支部同時通訳論研究分科会.
- 横山仁視 (2010). 「全学共通科目としての英語教育と e ラーニング ～学習支援のあり方と協力体制の構築～」(株式会社アルク教育社主催「ALC NetAcademy2 ワークショップ」、京都会場での口頭発表)
- BRADFORD-WATTS, Kim・YOKOYAMA, Hitoshi (2011). “The Effectiveness of Integrating ALC NetAcademy Software into a Compulsory English Language Curriculum” (大学英語教育学会 (JACET) 第50回記念国際大会、西南学院大学での口頭発表).
- BRADFORD-WATTS, Kim・YOKOYAMA, Hitoshi (2011). “The Effectiveness of Integrating ALC NetAcademy Software into a Compulsory English Language Curriculum”, *The JACET International Convention Proceedings*, 551-556. (大学英語教育学会 (JACET) 第50回記念国際大会、西南学院大学、大会予稿集).
- Lambert, S (1988). “Information processing among conference interpreters: A test of the depth-of-processing hypothesis”, *Meta*, 33 (3), 377-387.

(資料 1) 負荷試験におけるサーバ側の負荷状況とクライアント側について

京都女子大学様

負荷試験におけるサーバ側の負荷状況とクライアント側について

2007/10/10

三谷商事株式会社

ミテネインターネット株式会社

京都女子大学様に導入しました NetAcademy2 について 10 月 4 日に行われました負荷試験についてご報告します。

・サーバ側の負荷状況

テスト 1（同時学習 60）・テスト 2（同時学習 120）の各試験においては目立った負荷は見られず、最大が 10%台を記録するような状態でした。テスト 3（同時学習 150）の試験については、テスト後のログアウト作業時に CPU の利用率が最大 22%ぐらいまで行くことはありましたが、おおむね 10%台を推移するような状態でした。テスト 4（同時学習 90+3 分後に同時学習 60）においては概ねテスト 1・2 と同じような結果で、ログアウト作業時にもテスト 3 のように CPU の利用率が 20%台にあがることはありませんでした。

いずれの場合においても、サーバ上での操作において、（負荷のために）各種操作が重くなるなどの体感的な兆候は感じられませんでした。

また、テスト期間中を通して、CPU の負荷等による監視(CPU 負荷 80%以上の場合通知)による反応は一度もありませんでした。

	CPU 負荷の推移			
	Web サーバ		DB サーバ	
	読込み	ログオフ	読込み	ログオフ
テスト 1（同時学習 60）	10%台	10%台	10%台	10%台
テスト 2（同時学習 120）	10%台	10%台	10%台	10%台
テスト 3（同時学習 150）	10%台	10%台	10%台	22%(MAX)
テスト 4（同時学習 90+3 分後に同時学習 60）	10%台	10%台	10%台	10%台

ただし、実際の学習においては各 PC がユニット終了まで次々と問題のダウンロードを繰り返しますので、授業での利用時においては CPU の利用率はこれより上がると思われます。

全体として、サーバ単体では試験を通してサービスの提供が難しい負荷を受けるようなことはありませんでした。

サーバーの設定について

サーバーの接続に関する設定は次のとおりです。

- ・帯域幅調整 (制限なし)
- ・Web サイト最大接続数 (無制限)

・クライアント側

InternetExplorer のキャッシュ削除から、テスト完了までのダウンロードファイル数と容量をキャッシュフォルダより記録しました。

	ファイル数	サイズ
テスト直前	130	2.44MB
テスト直後	246	4.26MB
差分	116	1.82MB

	時間	失敗台数
テスト1 (同時学習 60)	22 秒	なし
テスト2 (同時学習 120)	32 秒	なし
テスト3 (同時学習 150)	40 秒 (143 台)	7 台 (列の中間)
テスト4 (同時学習 90+3 分後に同時学習 60)	32 秒+27 秒	なし

失敗した端末が各列の先頭から中間に集中していることから、一時アクセスが最も集中した時間ではないかと想定します。

サーバー側の負荷状況から考えますと、プロキシ、Firewall、回線について考慮する必要がありますのではないかと思います。

以上

(資料 2)

2013年度前期_1年必修英語 ALC 実習に伴うコンピュータ教室への移動表

(英文学科の例)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
授業回数 ALC/時限/教員															
PC教室での実習期間									ALC 課題学習期間						
ALC テスト日									ALC テスト 1			ALC テスト 2			ALC テスト 3
ALC テスト (0-ディン)									リーディング			リーディング			リーディング
ALC テスト (0-ディン)									リスニング			リスニング			リスニング
火3 大谷	4月9日	4月16日	4月23日	4月30日	5月7日	5月14日	5月28日	6月4日	6月11日	6月18日	6月25日	7月2日	7月9日	7月16日	
(火3 非常勤J)			SI07				SI07					SI07			
火3 横山	4月9日	4月16日	4月23日	4月30日	5月7日	5月14日	5月28日	6月4日	6月13日	6月18日	6月25日	7月2日	7月9日	7月16日	
(火3 非常勤N)			SI09				SI09		リスニング			リスニング			7月23日 7月25日
火3 非常勤J	4月9日	4月16日	4月23日	4月30日	5月7日	5月14日	5月28日	6月4日	6月11日	6月18日	6月25日	7月2日	7月9日	7月16日	
(火3 非常勤N)				SI07				SI07				SI07			

2013年度後期_1年必修英語 ALC 実習に伴うコンピュータ教室への移動表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
授業回数 ALC/時限/教員															
PC教室での実習期間									ALC 課題学習期間						
ALC テスト日									ALC テスト 1			ALC テスト 2			ALC テスト 3
ALC テスト (0-ディン)									リーディング			リーディング			リーディング
ALC テスト (0-ディン)									リスニング			リスニング			リスニング
火3 大谷	9月17日	9月24日	10月1日	10月8日	10月15日	10月22日	10月29日	11月12日	11月19日	11月26日	12月3日	12月10日	12月17日	12月24日	
(火3 非常勤J)						F201				F201					
火3 横山	9月17日	9月24日	10月1日	10月8日	10月15日	10月22日	10月29日	11月12日	11月14日	11月26日	12月3日	12月10日	12月12日	12月17日	12月24日
(火3 非常勤N)						F207			リスニング			リスニング			1月14日 1月16日
火3 非常勤J	9月17日	9月24日	10月1日	10月8日	10月15日	10月22日	10月29日	11月12日	11月19日	11月26日	12月3日	12月10日	12月17日	12月24日	
(火3 非常勤N)						J402				J402					

※ 非常勤講師担当は「非常勤」としてある。

※ Jは日本人教員、Nはネイティブ教員。

(資料3) ALC テストサンプル問題 (リーディング)

ALC TEST

時限 () 学籍番号 () 学生氏名 ()

--- Reading ---

[Unit: 47]

Why does it not bother others when two people talk on the train or bus, but it does annoy others when people hold conversations on their cell phones while (1) public transport? According to a psychologist, (2) to someone else talk on a cell phone is unpleasant (3) such a conversation is an "open loop" -- you can only hear one side of the conversation. A face to face conversation between two people is "closed loop," and (4) it does not bother others. Talking on cell phones is just one example of behavior that invades the personal space of others; in other words, rude behavior. Another example is young women (and young men, nowadays) (5) on makeup while using public transport. Such behavior would have been considered rude as recently as ten years ago.

電車やバスの中で二人の人間が会話していても耳障りとは感じませんね。それなのに交通機関を利用しているときに携帯電話で話をされると、とたんに不快に思えてくるのはなぜなのでしょう。ある心理学者によると、携帯電話で見えない相手と交わさる会話を聞くと不愉快に感じるのは、この種の会話が「オープン・ループ」だからだそうです。—あなたはその会話の一方しか聞くことができません。二人の人間が実際に顔を合わせて会話をするのは「クローズド・ループ」です。だから他人には耳障りではないのです。携帯電話での会話は、他人の個人空間に押し入る行為の一例にすぎません。言い換えれば迷惑な振る舞いです。若い女性（そして最近では若い男性）が公共の交通機関を利用中に化粧をするのも、そのぶしつけな振る舞いの例です。このような行為はほんの10年前なら無作法と見なされたでしょう。

- (1) to use / using / used (2) listening / to listen / listener
 (3) due to / when / because (4) therefore / however / then
 (5) put / putting / to put

(資料 4) ALC テストサンプル問題 (リスニング)

KWU 09-1 ALC Listening Test-B3 (Teacher page)

a) Read the following passage twice. Students listen and may take notes in the appropriate box. Then read questions 1 and 2 twice each. Students choose the best answer (a, b, c, or d).

Reading 1:

Today I sent a letter about a mistake on my order. The letter said: “Dear Sir or Madam, I am writing about the order I received yesterday. The order was for one black coffee maker, but I’ve received a white one. Please arrange the replacement right away. Please also tell me how I can return the wrong one I received. Yours sincerely, Joe Black”.

Questions:

1. What was wrong with the order?
2. What does Mr. Black want the company to do?

b) Repeat with the following reading and questions:

Wendy has a cute dog called Fido. They are on the way to a café for lunch. Wendy asks Hiroki to join them. Hiroki says that it would be nice, but worries that they may not be able to take Fido into the café. Wendy tells him that this café even has special food for dogs, like pizza, cookies, and icecream. She says that it looks just like ordinary food, and Hiroki says that he might try some of Fido’s food.

Questions:

3. How many people are going to the café?
4. What time is it?
5. What food is not mentioned in the passage?

Answers (2 points each)

Question 1	a
Question 2	d
Question 3	b
Question 4	b
Question 5	c

KWU 09-1 ALC Listening Test-B3 - Answer Sheet

Name _____

Student Number _____

You will hear Reading 1 twice. Please listen and take notes in the box below. Then your teacher will read questions 1 and 2 twice each. Choose the best answer from a, b, c, or d. Write a, b, c, or d in the Answer box.

Next you will hear Reading 2 twice. Please listen and take notes again. Then your teacher will read questions 3, 4, and 5 twice. Choose the best answer.

Reading 1 Notes:	Reading 2 Notes:

Question		Answer
1	a) Wrong color c) Wrong order number shape	b) Wrong size d) Wrong
2	a) Tell him to how to return the wrong item b) Give him his money back c) Replace it	d) Both a and c
3	a) One c) Three	b) Two d) Four
4	a) Morning c) Afternoon	b) Noon d) Evening
5	a) Icecream c) Cake	b) Cookies d) Pizza